Japan Geoscience Union Meeting 2012
(May 20-25 2012 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2012. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

SSS35-11 会場:303 時間:5 月 22 日 14:00-14:15

三重県内の文献史料からみた明応七年（1498 年）の地震による安濃津の被害
The damage of the medieval port town Anotsu by earthquake in 1498 from historical materials in Mie Prefecture

奥野 真行 [1*], 奥野 香里 [2], 畑中重光 [3], 葛葉 泰久 [3]
OKUNO, Naoyuki[1*], OKUNO, Kaori[2], Shigemitsu Hatanaka[3], KUZUHA, Yasuhisa[3]

[1] 三重県, [2] なし, [3] 三重大学
[1]Mie Prefectural Government, [2]none, [3]Mie University

三重県内で今後考慮すべき被災パターンについて検討するため，明応七年の地震に注目した．過去繰り返し発生してきた南海トラフ沿いの巨大地震のうち,「最大級の津波」を伴っていたことを複数の既存研究が指摘し，かつ，伊勢湾内の被害様相がそれ以降の巨大地震と異なっているとされる地震である．まず，明応東海地震の二か月前に発生し，国内の広範囲で大きな揺れや被害の記録がある明応七年六月十一日の地震に関する県内史料を調査し，安濃津の被害について検討した．次に，これまでの研究成果とも総合し，三重県内での状況という視点から，明応七年六月の地震及び同年に発生した一連の地震の全体像を考察することを試みた．

はじめに，今回の県内史料調査で,『神社明細帳』の中に,「（前略）明應三年甲寅五月七日諸國大地震同七年戊午六月十一日又地震此ノ時當神社并ニ小丹ノ郷ノ人民更ニ小丹塩屋ニ遷移ス地震数日ノ間ニシテ遂ニ小丹ノ郷為逆浪化海（以下略）」との記述を発見した．これは，現在，津駅西方にある小丹（おに）神社の由緒に関する内容である．明応七年六月十一日に地震があり，小丹神社と小丹の住民は，小丹塩屋に移ったこと，移る数日の間に，逆浪（さかなみ）により，小丹の土地が海と化したことが記されている.「逆浪」という言葉から，このとき発生した事象に津波が関与していたことが示唆される．

明応地震で壊滅した港湾都市安濃津について述べた矢田（1996）が紹介している史料の中にも，明応七年六月の地震に関する記述が複数みられる.『大日本国誌』には,「恵日山観音寺　安濃郡津大門町ニ在リ,（中略）往昔ハ今ノ津興村辺ニ在リシカ，明応三年庚寅五月七日・七年戊午六月十一日ノ地震ニ，土地海中ニ沈没セルヲ以テ，今ノ地ニ移ル（以下略）」とあり，また，西来寺の歴代の記録を編集した『龍宝山西来寺歴代記』には，三世の代の記録として,「寺地遷　明応七年午ノ六月ノ大地震ニ，元津ノ寺社・民屋，悉皆海濶ト成リヌ（以下略）」とある．恵日山観音寺と西来寺は，現在津市内にある寺院であり，いずれの記事からも明応七年六月の地震により，敷地等が海中に沈んだため，移転を余儀なくされたことがわかる．

これらの記述から，当時安濃津と呼ばれていた一帯は，明応東海地震ではなく，明応七年六月の地震によって，海中に没するような大きな地変が発生し，すでに大きな被害を受けていたことが推測される．

これまでの研究からは，明応七年六月十一日の地震での状況が明らかにされてきており，三重県周辺の地震記事も多い．津波に関して，都司（1980）は，豊橋市にある素戔嗚神社の流失記録から，当時神社が流失した場所で少なくとも３m以上の津波を推定しており，都司（1999）は，鳥羽市国崎の『常福寺文書』の記載から津波被害を，志摩市浜島町の『塩屋地下文書』の記録から，大きな津波があったことをそれぞれ想定している．また，都司（1980），中村・西山（1998），都司（1999）を参考にすると，京都，熊野三山，伊勢志摩，渥美半島にかけての広範囲で，特に申の刻頃を中心として強震動に関する記事が分布しており，これらは同一の地震によりもたらされた揺れであったと考えられる．

一方，飯田（1980）は，明応東海地震津波での溺死者が，伊勢大湊で 5,000 余人，伊勢志摩で約１万人であったことを紹介しており，三重県内で極めて大きな被害となっていたことがわかる．

これらを総合すると，明応七年六月十一日の大地震と八月の明応東海地震によって，三重県内は，広範囲が二度にわたって大きな揺れと大津波に襲われていたことになる.「最大クラスの津波」に加え，二か月余りの間に二度にわたって大きな被害を受けるというパターンは，三重県内で今後考慮すべき被災パターンの一つであると考えられる．

（引用文献）

飯田汲事（1980）：天正地震（1586）・明応地震（1498）の地震と津波災害について，自然災害資料解析，７，170-182.
中村操・西山昭仁（1998）：明応南海地震の存在について－明応７年６月 11 日の地震の可能性，歴史地震，14，193-199.
都司嘉宣（1980）：明応地震・津波の史料状況について，海洋科学，12-7，504-526.
都司嘉宣（1999）：南海地震とそれに伴う津波，月刊地球，号外 24，36-49.
矢田俊文（1996）：明応地震と港湾都市，日本史研究，412，31-52.

キーワード: 安濃津, 逆浪, 明応七年六月十一日の地震
Keywords: Anotsu, Sakanami, The earthquake of June 30, 1498